

# IMF-JC兵庫地区協議会 海外労働事情視察 ベトナム・タイを訪問して

本社ブロック 常議員

赤 松 昌 哉

(統括本部 総務人事部)



## はじめに

本社ブロック常議員の赤松です。去る2002年7月7日より11日の5日間、IMF-JC（金属労協）関西地区連絡会が主催するベトナム・タイ労働事情視察に参加させて頂きました。5日間という短い期間ではありましたが、この視察団に参加させて頂いた内容について報告させて頂きます。

## 惨劇を乗り越えて 急成長を続けるベトナム

最初に訪問した「ベトナム社会主義人民共和国」は、人口約7,700万人で、国土はインドシ

ナ半島の東半分を占め、日本からは直行便で約6時間、時差は日本よりマイナス2時間の国です。気候は国土が南北に約1,650kmと長いいため北部、中部、南部と地域により異なりますが、今回の訪問先である南部のホーチミン市（旧サイゴン市）は雨期と乾期があり、年間を通して平均気温が26～28と高く、熱帯モンスーン気候に属します。私が7月に訪問した際はちょうど雨期の最中で、日本の梅雨のような「じめじめ感」は無いものの非常に湿度が高く蒸し暑い季節でした。

歴史を見ますと、ベトナムは古くから様々な国に翻弄された苦い過去を持っており、1858年からフランスにより始まった植民地化政策は、その後の「インドシナ戦争～ベトナム戦争」を引き起こし、1975年のベトナム戦争終結までの約1世紀近くにわたって、ベトナム全土で多大な犠牲を払うこととなりました。

とくに1965年にアメリカ軍が介入してからの、国家を南北に二分した戦争は、当時の米ソ冷戦の代理戦争とも言われ、その戦禍の中で繰り返された数々の惨劇はいまも世界中の人々の記憶に深く残っています。

その後、1975年にベトナム戦争が終結し、社会主義国家として南北の統一を果たしましたが、国内政治が安定せず1980年代前半までは多くの経済難民を生み出すなど、貧困にあえぎながら多くの難問を抱える国となりました。

### 日程

2002年7月7日	日本出国－タイ経由－ベトナム入国
7月8日	AM:三洋ホームアプラインス ベトナムコーポレーション訪問 PM:ホーチミン市内視察
7月9日	AM:ホーチミン市内視察 PM:移動（ベトナム出国－タイ入国）
7月10日	AM:バンコク市内視察 PM:三菱自動車 シティホールコーポレーション訪問
7月11日	タイ出国－日本帰国



## ベトナム（ベトナム社会主義共和国）

- |      |                      |                         |
|------|----------------------|-------------------------|
| 1054 | 大越国成立                | 人口：7671万人               |
| 1858 | フランスのベトナム侵攻開始        | 面積：33万1688平方km          |
| 1945 | ベトナム民主共和国独立宣言～ベトナム戦争 | (人口密度227人／平方km)         |
| 1975 | サイゴン陥落               | 首都：ハノイ                  |
| 1976 | 南北統一（ベトナム社会主義共和国成立）  | 言語：ベトナム語                |
| 1977 | 国連加盟                 | 宗教：大乘仏教、カトリック           |
| 1986 | ドイモイ政策発表             | 政体：社会主義共和制              |
| 1995 | APEC加盟               | 主要産業：鉱業(原油、石炭など)、製造業、農業 |
|      | アメリカとの国交樹立           |                         |

### ベトナム社会主義共和国について

しかし、1986年に中国の改革開放政策を倣った「ドイ（変わる）モイ（新しく）」政策を導入して以降は、一転して経済発展の道を歩み初め、ここ数年の経済成長率で見ると、1999年でプラス4.6%、2000年でプラス6.7%、さらに2001年ではプラス6.8%と高い成長率を記録するまでに至っています。

経済の基本となる通貨はベトナムドン（VND：現在1円＝約100ドン）ですが、大都市では、ベトナムドンの他にUSドルも多く流通しており、観光地では日本円もある程度なら流通します。

また、国を挙げて国内産業の振興に力を入れる一方、大都市ホーチミンや首都ハノイ、古都フエなどは観光都市としても発展しつつあり、先進諸国並みの物質的な豊かさはないものの、現在のベトナムは人々の活気で満ちあふれているというのが訪問して最初に感じた印象でした。

## 三洋ホームアプライアンス ベトナムコーポレーション視察

### 有数の日本企業が進出するベトナム

ホーチミンに到着して2日目に訪問した三洋

#### 三洋ホームアプライアンス ベトナム コーポレーション

所在地：ヒンホフ第2工業団地内

会社設立：1996年

資本金：4400万米ドル

従業員数：364名（内日本人スタッフ10名程度）

生産内容：洗濯機および冷蔵庫の組み立て





組立を待つ洗濯機ドラム



若い人が多い職場風景

ホームアプライアンスベトナムコーポレーション（以下、三洋電機と略す）はホーチミン市からバスで1時間ほど走ったビエンホア第2工業団地内にあります。このビエンホア工業団地はかつてベトナム戦争時代にはアメリカの軍事基地であった場所で、現在は外国の企業を誘致し、国内産業の発展に大きく貢献している工業団地の1つです。近隣には他の日本企業も多く、久光製薬、富士通、日本ビクターなど日本の有名企業が名を連ねています。

三洋電機の敷地面積は約10万㎡と当社の播磨製作所の敷地面積9万8000㎡とほぼ同じで、事業内容としては洗濯機（年間生産台数約13万台）と冷蔵庫（年間生産台数約5.5万台）の組み立て生産を行っています。洗濯機はほとんどが国内向けとして生産していますが、冷蔵庫は東南

アジアはじめアフリカ諸国への輸出向けに生産されています。

ちなみに、ベトナムでの洗濯機の普及率は全土で約5%、最大の都市であるホーチミン市で約10%となっています。全国的に電気や上下水道のインフラが十分に整備されていないので、あまり電気製品全体の普及率も高くありません。しかし、テレビは全土で70~80%の普及率に達しており、どこの国も娯楽、情報に関しては感心が高いのだなあと感心しました。但し、テレビの電気は近くの公共施設や電柱から違法に電線を引っ張っていたり、自家発電装置でまかなっていたりと皆、それぞれに努力(!?)しているようです。

#### ベトナム進出企業の悩み

工場見学の前に行われた三洋電機の日本人スタッフの方との懇談会では、ベトナムの日本企業の実態など様々な話を聞かせて頂きました。日本企業からみた他のアジア諸国と比較してのベトナムの魅力としては、1) 労働争議が少なく労働環境が良好であること。2) 政情が安定していること。3) 中国への一局集中化を避けること。などが挙げられ、逆に問題点としては、1) ベトナム国内での部品調達が困難なこと。2) インフラが未整備であること。3) 終身雇用の概念が無く、離職率が高いこと。な



梱包される洗濯機



三洋電機日本人スタッフとの懇談会

どが挙げられ、多くの日本企業がベトナムに進出していますが、まだまだ問題も多くあるようです。

懇談会は、三洋電機やベトナムのことに留まらず、アジア経済など様々な話題で盛り上がり、三洋電機の方が「現在、世界人口約60億の内、中国とインドも含めたアジアの人口は約32億で、理論上は世界人口の半数以上がアジアに集中しているという計算になる。もちろん、中台問題やインドネシア、ミャンマーの政治不安、印パ対立など難問も多く抱えているが、単純に考えて人口が多いということは、それだけ様々な需要も多く、安価な労働力も豊富で消費市場、労働市場として今後ますます発展の可能性を秘めており目が離せない」と熱心に語られていたのが印象的でした。

なお、三洋電機においても現地採用者の離職率が高く、社内で各種の教育などを行っても、やっと戦力になりかけたところで退職し、条件の良い他社に転職するなど、問題点も多いとのこと。やはりどこの国においてもそれぞれの風土や国民性による問題があり、企業が文化の違う国に進出して活動することの難しさを感じました。

### 賃金は日本の1/20

懇談会の後、工場見学をさせていただきました。工場は比較的きれいな屋内で、すべてライ

ンでの流れ作業となっていますが、ベルトコンベアのラインに人間の数が多かったのには少し驚きました。ただ、工場内には空調が無く、私たち日本人にはとても暑かったのですが、日本人スタッフも含め現地の気候に慣れた方にはそれほどでもないとのことでした。慣れというのはすごいものだなあと感じた次第です。

従業員約350名の内ほとんどが10代後半から20代で、平均月収が約60万～100万ドン（日本円で6,000円～10,000円）程度です。ちなみに今回の視察に現地ガイドでお世話になったガイド兼通訳のロンさん（女性）は月収400万ドンとのことでした。どこの国も職種や経験、能力により賃金や処遇も様々であることを感じました。

なお、ベトナムでの一般労働者の賃金について調べると重工業に携わる労働者の平均月収は120万ドン、サービス業では40万ドン、電子製造業等は90万ドンとなっています。三洋電機の場合、会社設立がまもなく、労働者が若いため、平均より若干低い水準になっていると考えられます。

勤務時間は朝9時半から夕方18時半までで、隔週週休二日制を実施しており、時間外勤務割増は1.5倍、休日出勤は2倍の割増となります。深夜業の対象時間についても午後10時から午前6時と日本の法律より1時間長く、すべての企業に適用されています。

工場見学は1時間程度で終わり、お世話になった現地スタッフの方々と記念写真を撮って、三洋電機訪問は終了しました。

### バイク天国

午前中の企業訪問を終えた我々は市場視察ということで、ホーチミンの市内へ足を踏み入れました。市内中心部に入り、まず目に飛び込んできたのが大通りから裏道の路地まで、いたる所にあふれるバイクの数です。その数は、ホー

チミン市内で約200万台とも300万台ともいわれるほど多く（ホーチミン市内の人口は約600万人）、信号が赤の時など、止まっているバイクで道路が見えなくなるくらいの多さです。まさにバイク天国で、50ccのミニバイクから自動二輪まで様々な種類のバイクが2人乗り3人乗りで、信号無視、逆走のなんでも有りの中、ノーヘルで命を懸けて走っています。

市民にとってバイクの新車を購入することは、日本で新車の自動車を購入するのと同じ程度の感覚らしく、700~1,000米ドルと高価なので、町中を走っているほとんどのバイクが海外から流れてきた中古品とのことでした。とくに



ノーヘルで疾走する人びと



ホーチミンの町中風景

日本のホンダやスズキの中古バイクが多く、人気もあるとのことでした。

我々は前後左右から猛スピードで迫ってくるバイクの波に圧倒されながら、市街地中心部にあるベントイン市場を訪問しました。ここは今や観光スポットにもなるほど有名で、貴金属、ブランド品から衣料、食料品、さらには野菜、魚に干物と、なんでも揃っていました。隅の方では生きた鶏をその場で絞めて吊しているといった光景も目にしました。平屋で薄暗い市場の中には他人にもみくちゃにされながら、やっと人が1人通れる程度の通路があり、日本人観光客が多いせいか、あちこちからベトナム語にまじって日本語の呼び込みの声が聞こえます。基本的に定価という概念が無いので、売り手買い手の言い値勝負で買い物に挑まねばなりません。交渉方法も初めから1品のみを目当てに根気よく値引き交渉をする場合や、1つの店で買う品物を1つ1つ増やしていき、少しずつ単価を落としていくやり方など様々です。あちこち見ているとあれやこれや面白そうなグッズがいっぱいあったのですが、1つの店で交渉しているとあっという間に時間が無くなり、ほとんど買い物はできずに終わってしまいました。

夕食後の時間を利用して、ガイドの見習いで一緒にいたタイさん（25才の男性）にタクシー



買物客があふれるベントイン市場

でホーチミン市内を案内してもらいました。観光地でも土産物屋でも無いごく普通の本屋やCDショップ、屋台村のような所などを約1時間かけて案内してもらいましたが、夜、けっこう遅かったにもかかわらず、どこへ行っても人が多くて活気がある街だなあと感心しました。

ただ、ある本屋のレジ横にベトナム語で書かれた看板とお金の入った箱があり、聞いてみるとベトナム戦争時の枯れ葉剤の影響で生まれた奇形児に対する救済募金箱とのことでした。あまり観光客が来るようなところでは無く、ベトナムの人々もそんなに裕福な人ばかりではないと思うのですが、箱の中にはたくさんのお金が

入っており、それを見た時には、胸が熱くなり、同時に戦争を引き起こした人間の罪と愚かさを思わずにはいられませんでした。

## ホーチミンシティの光と陰

翌朝、市内を流れるサイゴン川の対岸にホーチミン市民の暮らす下町があると言うので、行ってみることにになりました。約2分程のフェリーで渡った先には、つい先ほどまで自分が立っていたところとは、とても同じ市内とは思えない町がありました。そこは道路の舗装もなく、



路地裏で



サイゴン川



軒先に並ぶ露天商



戦争証跡博物館にて

両側に連なる建物はどれも今にも崩れそうで、その軒先には露天商がならび、いろいろなものが入り交じったにおいに強い印象を受けるそんな所でした。わずか300メートルほどの運河のような川を渡っただけで、10年か20年の間ずっと時間がとまっているのではないかと思うほどの町並みを見て、社会主義の国でありながらも急激な経済発展は確実に貧富の差を生み出しているのだとしみじみ感じた次第です。ただ、対岸に見える市街地の高層ビルや街の発展ぶりを見てみると、数年先には、この下町の風景も発展とともに消えて無くなっているのかもしれないと、砂埃と喧騒の中でふとそんなことを感じました。

ベトナムでの滞在は、「経済の発展」「発展途

上国の活気」「戦争の傷跡と愚かさ」「貧富の格差」など普段の生活ではあまり考えないようなことについていろいろ考えた3日間でした。個人的にはもう少しホーチミンに滞在したかったのですが、次の行程もあり、3日目の午後に残る髪を引かれる思いで次の訪問国タイに向かいました。

## 東南アジアの雄 タイ

次に訪問したタイは人口約6,248万人で、面積が約51万3,000km<sup>2</sup>と日本の約1.4倍であり、国王を戴く立憲君主制の国です。東南アジアの中でも経済発展の進んだ国で、とくに首都バンコク市内はここ数年、急激に発展しています。高速道路が整備され、高層ビルが建ち並び、日本の都市とあまり変わらない様相をみせています。1998年に起こったアジア金融危機の影響で1998年の経済成長率はマイナス7.8%であったものの、翌1999年にはプラス4.1%、2000年にはプラス4.9%まで成長率を伸ばしています。国の主要産業は繊維、自動車などを中心とした製造業や農業、水産業が中心です。

### タイ（タイ王国）

- 13世紀 スコタイ王朝成立
- 14世紀 アユタヤ王朝成立
- 1782年 チャクリー王朝創設
- 1932年 立憲君主制に移行
- 1991年 クデターにより軍政
- 1992年 民政に移行



## MMC（三菱自動車）シティポールコーポレーション視察

### オートメーションより人海戦術

4日目にタイのMMCシティポールコーポレーション（以下、三菱自動車と略す）を訪問しました。場所は首都バンコクから東へ約120km、バスで約2時間半かかるラムチャバン工業団地内にあり、会社設立は1961年で40年の歴史を持っています。従業員数は2,395名でその内、日本人スタッフは20名程度、事業内容はタイ国内向けおよび輸出向けの自動車やトラックの生産、販売です。ここで作られている車種はランサー、デリカ、パジェロなど日本でもなじみの車が多く、49万5,000m<sup>2</sup>の広大な工場敷地内に

## MMC(三菱自動車) シティホール コーポレーション

所在地 : ラムチャパン工業団地内

会社設立 : 1961年

従業員数 : 2,395名 (日本人スタッフは20名程度)

生産内容 : タイ国内向けおよび輸出向けの自動車 (ランサー、テリカ、パジエロおよびトラック) の生産・販売



は、いくつかの製造ラインがフルで稼働しています。車種により異なりますが、この工場生産される自動車の1/4がタイ国内向けで、残りは海外へ輸出されるとのことでした。

初めに、工場敷地内のいくつかの製造施設をバスで周り、工場見学をさせて頂きました。まず目に付くのがどこに行っても掲げられている安全の看板で、さすがに国を問わずメーカーは「安全第一」であると思いました。製造については、日本の自動車メーカーの工場によく見る

ベルトコンベア式の生産方式ですが、少し違うのは、完全にオートメーション化されておらず、ベトナムの三洋電機と同様、いたるところで人の作業が入っているところです。完ぺきなロボット設備を導入するより安い人件費を有効に活用した方がコストが浮くのだそうです。安い労働力を求めて仕事が日本から海外へ流出し、産業の空洞化が問題視されますが、それをまざまざと見せつけられた様でした。流れ作業はセクション毎に数名のチームを組んでおり、それぞれがラインの上で担当の業務をこなすといったやり方です。作業員の年齢はバラバラで下は18才の若手からベテランまで幅広い年齢層の方が一緒に働いていました。

タイの経済は一時の危機的状況を脱し、現在は比較的好調で、国内需要も伸びており、新車の売れ行きも順調とのことで、既設ラインのフル稼働だけでは需要に追いつかないため、我々が見学した工場横の空き地にもう1棟工場を増設中であり、その説明を聞いた我々視察団は皆、羨望の眼差しで建設中の工場を眺めていました。

### 日本の憂いはタイの・・・

ひととおり工場内を案内してもらった後、引き続き事務所会議室で三菱自動車の方々との



出荷待ちのエンジンの前で



人海戦術が残る生産ライン





活発な意見交換

懇談会を行いました。ここでは日本人スタッフだけではなくタイ人従業員の労働組合幹部の方々も一緒に参加し、活発な意見交換が行われました。とくに、現地従業員の労働組合幹部の方は日本の労使関係について非常に興味を持っており、賃金交渉の仕方や各社の諸制度などについて我々がたじたじとなるほど様々な質問を受けました。中でも、現在の日本の労使関係で最も重要な案件は何かと言う質問に対して、我々日本側から「雇用の確保」であると答え、「仕事が海外へ流出し日本国内の産業が空洞化しつつあることも問題だ」とポロッと出てしまった回答には、現地従業員の組合幹部の方々からは苦笑いが起こる一場面もありました。懇談会は1時間ほど続き、非常に活発な意見交換ができたと感じています。

## おわりに

5日間の海外視察を振り返ると、まず、今回の視察団に参加させて頂き本当に勉強になったと感じています。現在の業務の上ではほとんど海外に関連が無く、個人的にもあまり海外などには興味がなかったのですが、今回の視察団に参加させて頂きいろいろなことを感じ、考えることのできた5日間であったと思います。

とくに、実際に現地へ赴き、自分の目でみて

考えることの重要性を痛感しました。例えば今、実際に何が問題になっていて、それに対し世の中が今後どのような動きになるか。それに伴い次に来る需要は何で、その需要をキャッチしビジネスにつなげていくには何が必要か、などの情報を的確につかむためには、アンテナをよく張って情報収集に努め、必要な情報の選別能力を養うことが必要なのだと自分なりに考えた次第です。

ベトナムでは黒く濁ったサイゴン川や舗装のされていない郊外の道路などを見ると、今後の発展とともにインフラ整備が進んで行けばそこから派生するビジネスチャンスはかなり大きなものになるのではと素人の私ですら考えていたほどです。

当社にはここ数年、若い従業員も増えており、ほとんどの方が業務やプライベートで諸外国に行かれた経験もあると思います。今後も様々なチャンスがあると思いますので、多くの人に私と同様の貴重な体験をして頂きたいと感じています。

最後に、今回このような貴重な体験をさせていただいたことと、送り出して頂いたユニオン会員の方々に心より感謝申し上げます、報告とさせて頂きます。長時間ありがとうございました。

以上

(文責：桂 健治)



エメラルド寺院